保育ドキュメンテーションを媒体とした保育所保育と家庭との連携・協働に関する研究

研究代表者　矢野　理絵　（くほんじ保育園　園長）
共同研究者　北野　幸子　（神戸大学大学院　准教授）
矢藤　誠慈郎　（岡崎女子大学　教授）
永田　久史　（第二聖心保育園　園長）
鬼塚　和典　（熊本藤富保育園　副園長）
椛沢　幸苗　（中居林こども園　理事長）
坂﨑　隆浩　（こども園ひがしどおり　理事長）
東ヶ崎　静仁　（飯沼保育園　理事長）

研究の概要

１．専門的情報を提供できるようにするために、全国54か所の保育所及びこども園に協力を求め、保護者が求めている情報、もしくは子育てで困っていることについてのアンケート調査を行う。
２．アンケートを分析し、必要と思われる題材を選択し、それについて回答と思われるドキュメンテーションを作成し、保護者に提示する。
３．提示されたドキュメンテーションが、保護者の意図したものであったかについて「いいねシール」を添付してもらい、その数で共感のパーセンテージを図る。
４．また「いいねシール」と同時に提示されたドキュメンテーションについてのコメントや意見を簡単にメモして提供してもらう。
５．これらを収集し、ドキュメンテーションの今回の方法について、ドキュメンテーションの変化、保育者の変化、保護者の変化、関係性の変化などの効果について分析する。
６．最後に、今後の方向性と取り組み、相互作用、連続性、顕在的ニーズと潜在的ニーズの省察、保護者との協働の道筋について考察する。

キーワード：協働、可視化による共感、双方のコミュニケーション

第１章　はじめに

保育所保育と家庭における子育て意識を共有していくためには、子どもの育ちへの思いが同じ方向を向いていることが重要である。互いが保育所保育や家庭の子育てに関する情報を共有することで、０歳から就学前の６年間の長期にわたる子育てが充実し良い方向へ向かうものと考える。

本来子育ての第一義的責任は保護者にあるのだが、社会を形成する集団の中においては、社会の一員としての人格形成の大きな部分を社会が担わなければならず、税金が投与されている保育所保育は、その中心の公共の施設として、大きな子育ての役割を担っている。また乳幼児期の生育環境はその後の成長に大きく影響すると言われることから、保育所は保護者の子どもを預かっているとはいえ、社会人を育てるという意味から保護者と同等に将来の子どもと、未来の社会へ責任を持たされている。

この意識から、これまでも保育所は保護者との情報共有のために様々な努力を重ねてきたが、ここで情報の意識を少し変える必要を感じている。

それは、今まではできるだけ多くの情報を同じように共有することが連携や協働であるという認識が強くあり、現状においては情報の量は相当確保されていると思われる。但しよく考えてみるとその情報はどちらからも一方的なものが多く、中には多すぎる情報に戸惑い、互いの情報が理解できず家庭においても保育現場においても不安や混乱を招く場合もある。

各種お便りをはじめ、個々の連絡ノートのやり取り、個人面談や園の行事への参加、園の様子のビデオ公開、保護者会などさまざまありながらも、保育所が意図する情報が保護者に正しく伝わり共有できているかを問われれば必ずしもそうとは言えないところがある。

今回のドキュメンテーションを使った研究は、情報が単なる知識として伝わるのではなく、子どもの一瞬一瞬の変化や成長を捉え可視化し、その状況が子どもにとって何を意味するのかを専門的視点を加え保護者に子どもの成長と子育ての喜びを体験してもらうことである。つまり情報収集の次の段階として、集まった情報をどう活用できるか、どう活用していくべきかを探る研究である。

前回、前々回の研究は、まだ第一歩ということで、保育所側が保護者に知ってほしい、子育ての喜びを感じてほしいという視点で提供する材料を選択し、ドキュメンテーションという形で提示し、保護者から今までと違う子育ての見せ方、見方に共感をもらった。今回は次の段階として保護者が求める情報を探り、それに対しての保育所側は専門家としてどのような返信をし、情報を求める側、求められる側の垣根をできるだけ低くして、子育ての連携、協働に繋げられるかを探究したものである。

第２章　保護者の子育てに関して困っている内容の調査

１．目的

社会環境の変化に伴い、今日における子育て環境は厳しい状況におかれている。核家族化、隣近所においての人間関係の希薄化から孤立した子育て、育児不安の増大や育児能力の低下を鑑み、こうした子育て環境を防ぐためにも、保育所保育は地域の子育て支援の拠点として、家庭と保育所保育が共に子育てを行っていく必要がある。家庭との連携・協働、双方向的、継続性、相互主体的な関わりで子育てに参画していく目的で、まず子育てに関して現時点での子育て環境を把握する必要があると考える。

２．方法

保護者が子育てについてどのように感じているか、保護者の子育て意識を把握するために、椛沢幸苗氏を会長に置く保育総合研究会の会員施設において子育てのアンケートを実施した。

○調査日：2015年６月～８月

○協力園54ヶ園（北海道１、青森県10、岩手県２、秋田県３、福島県４、茨城県11、新潟県２、静岡県１、大阪府４、広島県１、徳島県１、愛媛県１、福岡県１、熊本県７、大分県４）

○対象者　園保護者

○回答者　３，６６９人

資料：アンケート内容

「保護者の子育て意識調査」アンケート

Ｑ１．主に子育てをしている方はどなたですか？一つだけを選んで○印を付けてください。

①母　②父　③祖母　④祖父　⑤その他

Ｑ２．Q1の方の年齢は

①20～25歳　②26～30歳　③31歳～35歳　④36歳～40歳　⑤41歳以上

Ｑ３．お子様の年齢と性別は（満　　歳）（男・女）

※保育園・こども園に通園しているお子様のうち一番下のお子さんについてお答えください。

Ｑ４．お子様は何人きょうだいの何番目ですか？

（　　）人きょうだいの（　　）番目

Ｑ５．お子様は保育園・こども園に入園して何年目ですか？

（　　）年目

Ｑ６．回答している保護者の方にお尋ねします。お子様に対して以下の行動や思いがどれくらいありますか？該当する番号一つに○印を付けてください。

⑴「～したらダメ」と行動を制限する

①よくある　②ときどきある　③ほとんどない　④ない

⑵　周りの子どもやきょうだいと子どもを比較する

①よくある　②ときどきある　③ほとんどない　④ない

⑶　子どもがすることを先回りして、代わりにする

①よくある　②ときどきある　③ほとんどない　④ない

⑷ 「早くしなさい！」と子どもを急がせる
①よくある　②ときどきある　③ほとんどない　④ない

⑸ 子どもに何でも早くできるようになってほしいと思うことがある。
①よくある　②ときどきある　③ほとんどない　④ない

⑹ 子どもにこうあるべきだという理想像をつい押し付けてしまう。
①よくある　②ときどきある　③ほとんどない　④ない

３．結果「保護者の子育て意識調査」アンケート結果

保育科学研究「保護者の子育て意識調査」集計表

Q1. 主に子育てしている人は

①母	②父	③祖母	④祖父	⑤その他
3504	81	65	3	16

Q2. 主に子育てしている人の年齢は

①20～25歳	②26～30歳	③31～35歳	④36～40歳	⑤41歳以上
206	739	**1229**	988	512

Q3. お子様の年齢・性別

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
男	97	297	402	370	336	262	84
女	74	319	342	371	359	298	61

Q4. お子様何人きょうだいの何番目

1人	1142人
2人きょうだい　1番目	265人
2人きょうだい　2番目	**1336人**
3人きょうだい　1番目	15人
3人きょうだい　2番目	97人
3人きょうだい　3番目	646人

4人きょうだい　1番目	2人
4人きょうだい　2番目	7人
4人きょうだい　3番目	17人
4人きょうだい　4番目	114人
5人きょうだい　5番目	28人
6人　〃　番目	5人

Q5. お子様は保育園・こども園に入園して何年目

1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
933人	**908人**	794人	524人	338人	135人

Q6. 保護者にお尋ね（行動や思い）

(1)「～したらダメ」と行動制限する

①よくある	②ときどきある	③ほとんどない	④ない
1261人	**2042人**	161人	27人

(2) 周りの子どもやきょうだいと比較する

①よくある	②ときどきある	③ほとんどない	④ない
193人	**1669人**	1356人	463人

(3) 子どもがすることを先回りして、代わりにしてしまう

①よくある	②ときどきある	③ほとんどない	④ない
193人	**1880人**	1287人	276人

(4)「早くしなさい！」と子どもを急がせる

①よくある	②ときどきある	③ほとんどない	④ない
1345人	**1704人**	394人	229人

(5) 子どもに何でも早くできるようになってほしいと思うことがある

①よくある	②ときどきある	③ほとんどない	④ない
542人	**1785人**	1061人	303人

(6) 子どもに「こうあるべき」と理想像を押し付けてしまうことがある

①よくある	②ときどきある	③ほとんどない	④ない
126人	990人	**1567人**	877人

4．考察

「～したらダメ！」と行動制限するという設問の結果では、よくあるとの回答が36％を占め、ときどきあるとの回答と合わせると95％に及んでいる。この制限しなければと感じる原因が、周囲への影響や迷惑を考えてのものなのか、保護者自身のその場の感情のみなのか、その一瞬だけを捉えてのものなのか様々であるが伝えようとはしている。そこに必要だと感じるのは、子ども自身の判断で静止・自己統制するためのステップではないだろうか。「なぜしてはいけないのか」が伝えられると良いのにと感じる。

「周りの子どもや兄弟と比較する」という設問の結果では、およそ五分五分の結果となっている。「比較する」という単語の解釈に違いがあるのか、現場で捉える実感としては８割を超える保護者の方々が他者との比較を用いて様子を話されるという点で結果に乖離が見られる。あらゆる方面からの情報の中で「比較する」という単語に様々な解釈があったり、自身の姿に気づけていなかったりする可能性がある。比較することは決して悪い事ではなく現状把握には必要であるが、比較した結果の使い方として否定するのではなく、未来に向けた方向性の根拠とできるような発信が必要なのではないか。

「子どもがすることを先回りして、代わりにしてしまう」という設問の結果も、およそ五分五分の結果となっている。先回りをしない方々が、成長の歩みを待つ見守りなのか放置なのかが判断しにくいが、連絡帳や口頭で聞く「集中してできない」・「すぐに取りかからない」といった家庭での姿から考察すると、保育園で生活する子どもたちの姿と保護者が感じている子どもの姿の感じ方に乖離が見られる。１つの行為をやり遂げる事で何が育つのか、やり遂げるまで待つ事の意味が理解できていない方がいるのではないだろうか。「早くしなさい！」と子どもを急がせるという設問の結果では、よくあるとの回答が37％を占め、ときどきあるとの回答と合わせると83％に及んでいる。急がせる原因がどこにあるのかだが、大人の都合や時間に合わせたものなのではないか。園内で見かける急がせる姿としては朝が多く、仕事に向かう保護者の都合が働いている事が見て取れる。子どもが何故しないのかには寄り添えず、つい急がせてしまう姿があるようだ。反面、お迎えの際になかなか帰らずゆっくり遊ばせ保護者なりに寄り添おうとする姿がある。しかし、子どもから眼を離し保護者同士で話し込む姿が多く見られることから子どもの育ちを目的とした寄り添いとはなっておらず、このような時間でも良いので、子どもと向き合い遊びや子どもとの会話を通して、できるようになった事、感じた様々な思いや感情を共有しようと思える発信が必要なのではないか。

子どもに何でも早くできるようになってほしいと思うことがあるとの設問では、「よくある」・「ときどきある」を合わせると63％となっている。あまり顕著に現れている訳ではないが、早く手が離れて欲しいとの願いがあり、顕著に現れていない理由として「このように育って欲しいと願う子ども像」が、まだ持てていないのではないだろうか。

子どもに「こうあるべき」と理想像を押し付けないとの回答が約７割を占めている。「あるべき」や「理想像」、「押し付け」といった単語への反発もあるのだろうが、「このように育って欲しいと願う子ども像」、「優しさ」・「元気さ」・「粘り強さ」・「努力」など気持ちの部分で大事に育って欲しいと願う部分も明確となっていないことが見て取れるのではないだろうか。これは夫婦や家族のそれぞれが担う役割が多種多様重責化し、様々な事におわれる中で「このように育って欲しいと願う子ども像」についての話し合いの必要性や機会が少なくなっていることも原因の１つなのではないだろうか。

結果からみえるものとして、「～したらダメ！」との行動制限や、「早くしなさい！」と急かす声かけは目的や見守りがあっての声かけではなく、感情から発せられたものと推察できる。また、その他の設問への回答も合わせて「親の都合の良い子」には育って欲しいが、「このように育って欲しいと願う子ども像」が持てておらず、持っていてもその部分へのアプローチとして何が必要なのか、その成果は近くに居ると見えにくいものである事などが判らず、子どもと向き合おうと思う気持ちがあっても様々な社会的要因から来る保護者自身の疲弊から苛立ちや焦りに繋がっている部分もあるのではないだろうか。

我々からの保護者へのアプローチとしては、どのような試みや活動、声かけがどのような発達に繋がるのか様々な取り組みを発信し、保護者から子どもたちへの声かけの下支えとなるよう試みて良いのではないだろうか。また、その発達は一朝一夕で現れるものではなく、できるようになるまで慌てず焦らず積み重ねて伝え続ける事で身に付いていくものである事を発信し、子育てを共有する中で保護者の頑張りへの寄り添いも考慮する必要が有るのではないだろうか。

さらに、その発信は一方通行では浸透や支援には至らないと考えられ、保護者との双方向のやり取りを可能とする手法の確立が必要なのではないだろうか。

第３章　ドキュメンテーションを通した保護者との連携の試み

1．目的

ドキュメンテーションとは、発達の記録ではなく、実践を記録するものであり、園児が何をしたのか、作ったかというだけではなくその過程を記録することに意義があるものである。

また実践とは「かたち」のないもの、日々変化するものであるが、それを映像にすることにより視覚を通し見

える「かたち」にすること、すなわち可視化することがドキュメンテーションである。

またドキュメンテーションをすることにより、園児が自発的に動くよう保育者は環境を用意し、それに対しどのように園児と関わっていくのか、園児の自発性が芽生えるような関わりをすることが求められてくるのである。

保育者が園児との信頼関係を十分に築き、園児が自ら安心して環境に関わりその活動が豊かに展開されるよう環境を整え園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するよう努めるものであるのなら物的環境を整えるだけではなく、人的環境として園児に対して関わっていく中で答えではなくヒントやアドバイスをする役割として関わっていくことも求められてくるのである。

またドキュメンテーションとして可視化することにより保護者にも園児の様子が伝わりやすくなり、行動の過程も伝わり園児が自発的に動く様子も伝わっていくのである。

これらからドキュメンテーションの効果として考えられることを以下に挙げる。

・園児にとっての効果
　保育者が自分の考えや発信に対して関心を寄せてくれている証が得られる。
　園児が自発的に活動することができ考える力が育つ。
・保育者にとっての効果
　園児への理解を深める情報源となる。
　保育者自身の教育・保育の振り返りとなり保育者の資質向上に繋がる。
・保護者にとっての効果
　園の様子を知ることができる。
　どのように活動しているのか、なぜそのように活動するのかを理解することができる。
　育ちを実感することにより親の責任感を感じることができる。

以上のように、園児・保育者・保護者の三者にそれぞれの効果が期待され、それはドキュメンテーションを通しての効果なのであれば、ドキュメンテーションを通して園児・保育者・保護者が共に育つことが期待できるわけである。

園として保護者支援が求められている昨今、子どものより良い育ちを願う保育者・園と保護者が互いに連絡をとり､協力し合って物事を行うことができるのであれば、まぎれもなくそれは連携であり、まさにドキュメンテーションは保護者と保育者・園の連携の架け橋になりえるものなのである。

保護者がドキュメンテーションを通して子どもの内面、外面双方を可視化することで子どもの様子を知り、子どもの活動やなぜそのような活動をとっているのかを理解し子どもの成長していく姿を知ることは、自らの子育ての振り返りにも繋がっていくことでありドキュメンテーションを通して保育者・園と保護者との共通の理解に繋がり保護者との連携が進んでいくものと考える。

そして一人でも多くの保護者がドキュメンテーションに目を通して何かを感じとってもらうことを願うのであれば、ただドキュメンテーションを提供するだけの一方通行ではなく一人でも多くの保護者がドキュメンテーションに目を通し、保護者が何を感じたか保護者の反応を受け止められる、さらなる一歩の手立てを考え、一人でも多くの保護者と共に育つことがドキュメンテーションを通してのさらなる連携の試みと考える。

２．方法

（１）調査の実施方法

ドキュメンテーションの取り組みに先立って、「保護者の子育て意識調査」アンケートを行った結果から、子どもに対しての行動制限を発しているという反面、子どもに対して無関心な数値も目立っていた。また、自由記述より子育ての大変さ、精神的支えの必要性、心の余裕のなさが読み取れた。

この結果から保護者の育児不安、子育て力の低下などに鑑み、協力園に「教育・保育ドキュメンテーション」を作成依頼した。方法は、発達段階に合わせた基本的生活習慣の内容に関してのドキュメンテーションを保護者に対して発信し、興味を持ったドキュメンテーションの内容について共感したら「いいね！シール」、気づきのコメントを貼ってもらい、「いいね！シール」・コメントが保護者の育児感、保護者と保育者の双方の関係性の変化が見られたかを検証した。

○調査日時：2015年９月～11月
○実施園：園数（年齢重複）12ヶ園
　　対象保護者数　1,991人
○データー収集の方法
Ⅰ保育教諭・保育士等への依頼
・教育・保育ドキュメンテーション作成手順
１．アンケート集計表の「Ｑ６　保護者にお尋ね（行動や思い)」のところの（１）～(６）の項目のなかで、数字が目立つものの中で「家庭と共通する行動」を園内の子どもの様子から探し出す。この時、担任だけではなく、園全体や何人かで相談し、どのような場面をドキュメントするか決めることにより、家庭の困り感の実情を深める。
　例題
　①Ｑ６の『(１)「～したらダメ」と行動を制限する』を選んだとする。
　②園の中で同じように行動制限をすると想定される場面を選択し、ドキュメンテーションを作成する。
　③次にコメントとして「子どもはいろんなことをするけれど、危険がない限り、学びの大切な経験だから、すぐにダメって言わないでゆっくり見てあげましょ

う」などのメッセージをつける。
2．決まった内容をドキュメンテーションにし掲示する。
3．その掲示したドキュメンテーションの内容について、保護者が共感するかどうかを「いいね！シール」を張ってもらい、簡単なコメントを書いてもらう。

II 保護者への依頼

《ご意見をお聞かせください》
先日はお忙しい中、当園のアンケートにお答え頂きありがとうございました。大変助かりました。右にアンケート結果を報告させて頂きます。
ところで、この結果をもとに簡単な「保育のドキュメンテーション」を作成しました。子どもの発達や頑張りを見つけて作りました。
このドキュメンテーションを見て、子どもの様子や発達に共感して頂き「あっ！なんだかいいな」と思った方は、是非「いいね！　シール」をシール欄に貼ってください。私たち教育・保育するものの励みにさせて頂き、より良い教育・保育を目指したいと思っています。
また、掲示したドキュメンテーションについて何かご意見がありましたら、準備したポストイットに簡単なコメントを書いて頂き、コメント欄に貼って頂ければ嬉しいです。どうぞよろしくお願い致します。

（2）「いいね！シール」の意図
ドキュメンテーションという媒体によって、保育園等の日常の保育生活や担当者からの伝えたいメッセージは伝わりやすくなった。しかし、一方的なメッセージではないかという疑問もある。私達は、ドキュメンテーション作成だけに満足して、園からの発信が家庭の育児に何らかの影響を与えたか、保護者自身の子育て力が上がったか、それにより保護者がどのように変化するのか、また、保育者の変化もあるのか。そのような視点から、今回は、SNS、Facebook、Twitter、

LINEといったツールによる「いいね！ボタン」に着眼した。この『メッセージに共感』ということがこちらから発信した保育のメッセージにどれだけの人が共感するだろうか、また、園から伝えたいことが保護者の目に留まっているのだろうか。そのような意図で「いいね！シール」とドキュメンテーションを見てのコメントを試みた。

3．結果と考察

（1）連携を促す媒体としての「いいね！シール」
今や日常で使われているSNS、Facebook、Twitter、LINEなどは、「社会的ネットワーク」および「社会的な要素」でもある。友人関係、知人関係、共通ステータス（出身、趣味など）関係などの「人と人の関係」と置き換えることができるコミニュケーションツールであることは言うまでもない。「コミュニケーションネットワーク」は、人と人、人と業者等の間、すなわち双方向のコミュニケーションを行うことができる場所と置き換えることができる。
Facebook等の良いところは、「いいね！ボタン」で簡単に意思表示ができる点である。今回のドキュメンテーションにもこれを活用した。保護者と担当者、および保護者と園の関係をドキュメンテーションの「いいね！シール」で構築し、双方向のコミュニケーションを可能にすることができると考えた。
ここで用いられる「いいね！シール」の基本的な意味付けであるが、『共感』という意味を持つと理解する。すなわち、“いいね＝共感、同意”という意味である。ただ、その使い方は多様でもある。その意味に次のようなことが考えられる。
1．ドキュメンテーションをちゃんと見ました！という意味。
2．ドキュメンテーションの内容に共感したことを示す意味。
3．コメントの意見に対して、同意したという意味。
4．なんとなくドキュメンテーションの写真が良いという意味。

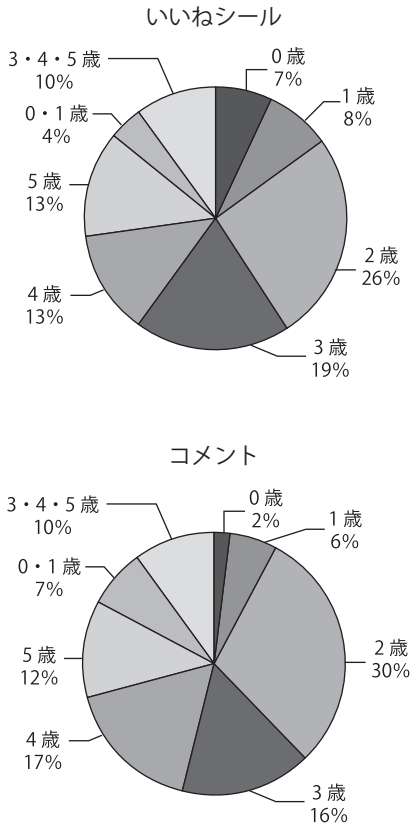
（2）集計結果から見えるもの
「いいね！シール」数が対象保護者1,991人に対し873個シール（44%）、コメント数が164コメント数であった。ドキュメンテーションそのもののとの関連はここでは控え、数字に着眼する。
まず、表1に見られる873個シール（44%）の数字だが、対象保護者のシール数が4%から75%との差が開いた。これは、各園に尋ねると掲示の対象者の違い（ドキュメンテーション対象年齢のみか、全保護者か）、掲示場所の違い（部屋内か玄関か）などが開きの要因である。数字の開きはあるものの44%という数字から、半数近くの保護者がドキュメンテーションに共感したという

結果と見られる。また、年齢別に置き換えると２歳児、３歳児の保護者の関心が高いことが伺われる。

表１：ドキュメンテーション掲示後のシール数とコメント数

実施した年齢	シール数/対象保護者数	%	保護者からのコメント数
0歳児	8/12（A園）	67	0
	31/63（B園）	49	0
	18/44（C園）	41	1
	4/8（D園）	50	2
1歳児	17/24（A園）	71	0
	3/83（D園）	4	0
	23/44（C園）	52	1
	10/17（D園）	59	9
	21/50（I園）	42	0
2歳児	16/24（A園）	67	2
	23/44（C園）	52	4
	11/19（D園）	58	8
	59/79（E園）	75	8
	55/136（F園）	40	11
	22/69（G園）	32	2
	33/65（R園）	51	9
	7/19（T園）	37	5
3歳児	19/29（A園）	66	0
	7/83（D園）	8	2
	23/44（C園）	52	2
	10/18（D園）	56	7
	52/79（E園）	66	5
	23/69（E園）	33	2
	35/65（R園）	54	9
4歳児	18/29（A園）	62	0
	23/44（Y園）	52	2
	10/14（O園）	71	6
	26/69（A園）	38	2
	33/65（R園）	51	7
	0/18（H園）	0	11
5歳児	20/28（A園）	71	1
	5/83（D園）	6	1
	23/44（C園）	52	3
	5/12（D園）	42	4
	28/69（N園）	41	3
	32/65（G園）	49	7
0・1歳児	35/65（G園）	54	11
3・4・5歳児	20/63（B園）	32	0
	65/136（F園）	48	17

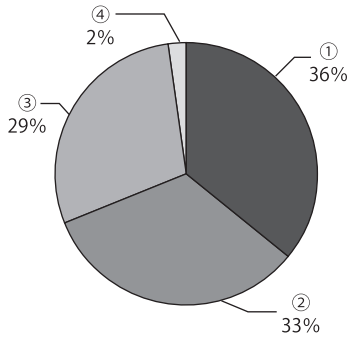
図１：年齢別区分け



つぎに、ドキュメンテーションを見ての164コメントを4つのカテゴリに分類した。

①園の様子が良くわかった。
②自分の子育てに対しての反省。
③これからの子育てに実践してみよう。
④ドキュメンテーションを見て親子の会話ができた。

図２：カテゴリ別



コメント数は①59コメント②54コメント③48コメント④３コメントである。

この結果により保護者の子育ての振り返り、保育のアドバイスによる意識の変化が伺われる。と同時に園での

生活の様子が充分に伝わっていないということが見えてくる。

「いいね！シール」は少ないがコメント数は多い、また、逆の結果もある。どちらかには意思表示を表すという点では、ドキュメンテーションが園と保護者との双方のコミュニケーションツールになっていると捉えられる。

（3）まずは保護者の反応を知ることの大切さ

ドキュメンテーションの特徴は、コミュニケーションのツールとして最も分かり易く保護者との良好な関係性を構築できることである。ドキュメンテーションを通して「いいね！」やコメントをしていくことで関係性を構築することができる。保護者からの反応を得るためには保護者がどのようなことを考え、何に興味があり、どのような情報・コミュニケーションを欲しているのか把握しておくことが良好な関係性を築く上でも必要である。

数日掲示することにより保護者の興味を示すものが見えてきた。このドキュメンテーションを数回続けると「いいね！シール」やコメントが何件かつくようになった。その数値をみると、どのようなドキュメンテーションが保護者に受け入れられているのかがわかる。

「いいね！シール」がたくさんついていてもコメントが無い、反応がない。そのようなドキュメンテーションは写真の画像、文体、内容のチョイスした構図など、様々な要素が原因と思われるが、何よりも保護者の知りたいニーズとマッチングしなければ共感は得られない。ドキュメンテーションの取り組みに先立って、「保護者の子育て意識調査」アンケートを行った結果から、子どもに対して無関心な数値も目立っていた点にも繋がる。

コメントについてもドキュメンテーション掲示に付箋して貼ってあるコメントにより、自分と同じ気持ちの人がいるとわかることにより、前向きな姿勢が見えることも結果として出ている。このことによる連帯感が生まれたのではないか。例えばBが「いいね！シール」、コメントの付箋を貼る。それを見てAが「いいね！シール」を貼る。相互に意見を肯定しあう中でAとBとの価値の共有が図られてゆき、AとBとの間に信頼関係が作り出されてゆく。今回の「いいね！シール」及びコメントの活用は、新たな保護者間の連帯感が生まれた。

ドキュメンテーションの掲示により、家庭でもやってみようなどの子育て力の向上に繋がればという願いがあっても、その結果を目にすることはなかった。一方的に情報だけを発信するような媒体では、双方の向上が見えない。ドキュメンテーションという媒体を通して保育生活を可視化し、それを「共感」というカテゴリに入れるか入れないという行為により園と他の保護者に何が伝わったのか、それが今後の保育にどう連携、協働していくのかが、わかりやすくなったのではないか。園と家庭の双方のコミュニケーションについて、今後深めていくことが課題である。

第４章　ドキュメンテーションを通した効果に関する分析

ここでは保育士および保護者向けにアンケートをとった結果及び研究調査対象園より提出されたドキュメンテーションに基づき自由記述を交え各項の効果について考察する。

１.ドキュメンテーションそのものの変化

―ドキュメンテーションの技術・内容・活用の変化―

保育士のコメントより「乳児期の子どもの思いや発達過程について、論述で書き記すのではなく、実際の子どもたちの姿を写真で掲示し、家庭での場面を想像しやすくした」という記述に現れているように、文字のみで伝えるよりは写真を通じて実際の姿を合わせて伝えるほうがより内容が伝わりやすいことが調査より示されている。そのうえで、「保護者の方により伝わりやすいためのレイアウトや文章を心掛けた」「作成する際にドキュメンテーションの題材としたいものは浮かんだが伝えることを絞り込むことや読んでもらいやすい文字数、レイアウトにするにはどうしたらよいかということに苦心した」というコメントに現れているような伝え方や伝える内容について情報発信側である職員が受け手側の立場になって作成をしていく必要を感じていることがうかがわれる。

保護者への周知の方法には園内の掲示とお便りとしての配布の２通りの方法となり、中でも園内掲示においてはすべての保護者への周知として玄関などへの掲示とドキュメンテーションの対象年齢のクラス内への掲示など掲示の方法に園によって差異が見られたことなどからも、職員が受け手側の立場になって掲示をしていくことの難しさ・試行錯誤の跡が垣間見られた。

写真を通じて園での様子を保護者へ伝えることができるようになった後に考えるべきことは、単なる園での様子を伝えるだけでなく、そこで行われている活動への価値を可視化するための「まとめ」としての教育的な取り組みへと昇華させるための手法、つまり記録をドキュメンテーションへと導いていくためのスキルアップが重要であると思われる。

２．保育者の変化

―保育者の日ごとの保育実践の変化、態度の変化―

保育士の感想を大きく分類すると１.「園での様子が詳しく分かった」２.「園での活動の意図する部分（ねらい等）が再確認できた」３.「マイナスをプラスのイメージに変えて子育てを楽しむきっかけにしたい。自分にとってもどんなことから子どもたちが学べることがで

きるのか」という３種類のカテゴリに集約できる。１．については記述するだけではなく写真を交えることでより活動にイメージを持ちやすく理解を深めることができるなど、ドキュメンテーションがあくまでも活動の記録にとどまるものである。２．については自園で行う保育のみにかかわらず、活動の意義や目的などについても客観的に再考させられる保育士の学びの機会になっていることが伺える。３．については現在の活動を次の活動に続けていくためにはどのようにすればよいのか、といった発展的な学びや次の学びへの意欲へとつながっていることが伺える。

このように３種類のカテゴリに集約されるのは保育士個々のドキュメンテーションに対するとらえ方によるものが大きいが、ドキュメンテーションそのものの内容にも影響を受けるものと考えられる。

３．保護者の変化

―日頃の変化―

ドキュメンテーションのテーマによって多少のばらつきが見られるものの、１．園からの提案やドキュメンテーションに挙げた活動を「休みの日やゆとりのある時に取り組んでいきたい」といった行動変容につながるきっかけを得ることができたと答えるカテゴリや２.「反省させられました。」「悩んでいたのでとても勉強になりました。」といった意識変化のきっかけを得ることができたと答える２種類のカテゴリに集約される。

両方に共通している認識としては「わかっているのだが、時間がなく大人のペースで物事をこなしてしまっている」ということであり、ドキュメンテーションを通して「いいねシール」の数や寄せられたコメントから、少なからず、自分たちの行動は子どもたちにとって相応しいものではないということを再認識させるきっかけを与えることができたのではないかといえる。

ただ、認識はするものの行動変容へのきっかけに至るコメントは極端に少なく、そこには「わかってはいるのだが、時間がない」といった物理的な理由が存在していることもコメントから明らかになった。

今後の課題としては、今回の調査から意識変革まではドキュメンテーションを通じて可能であるが、保育園・認定こども園が保育のプロとして日々行っている保育技術をドキュメンテーションを通じて紹介していくなど保育スキルをどのように保護者へ周知浸透させ行動変容につなげていくのかが課題となっているといえる。

４.関係性の変化

―保護者と保育者の変化、協働という意味合いでの変化―

保護者や保育士に園の取り組みや活動の意図を理解してもらうためにドキュメンテーションを通じて園から掲示やお便りの配布などとして一方的に情報を提供してきた感があるが、今回の調査ではドキュメンテーションに共感した方には「いいね！シール」を貼っていただいたり、コメントを記入いただいたりなど、ドキュメンテーションを介した双方向性のやり取りを念頭に行ったことが大きな研究テーマとなっている。

その結果、保育士からのコメントに「自分のクラス以外の園での様子が分かった」「自分の保育に取り入れたい」など、保育士相互理解促進のためのツールとしての役割や「保護者が何気ない生活の写真（様子）を見ることができたことを喜んでいたので、行事など特別な時だけでなく、毎日の成長の様子を知らせていくことが大切である」「保護者から直接感想をいただけた」など、保護者と園とを結ぶコミュニケーションツールとしての役割を担っていることも伺い知ることとなった。

中でもコミュニケーションツールとしての役割は多岐に及んでおり、コメントがなくても「いいね！シール」を貼っていただくことが保育士の励みとなり、逆に「いいね！シール」を貼っていただけなかったり、数が少なかったりすることで保育士が保育内容やドキュメンテーションとしての伝え方など理解促進について再考するきっかけなど、保育士側の保育に対するモチベーションを維持向上させるためのツールとしてや保育園での出来事を家庭であまり話さない子どもから、保育園の内容を聞き出す良いきかっけ、親子のコミュニケーションづくりに大きく寄与していることが伺える。

つまり、ドキュメンテーションを介して担い手側と受け手側との思いを通わせることができるだけでなく、ドキュメントの主人公である子どもたちと大人とが思いを通わせることができる双方向性のツールとしての役割を担うことができるということが証明されたのである。

終わりに　　課題と提言

今回のドキュメンテーションの調査研究は、家庭との連携ばかりではなく、ドキュメンテーションという情報の活用が保護者や家庭の子育てへの一助になることを期待してのものである。また今回の研究を踏まえ、保育のドキュメンテーションの情報としての活用は本来どうあるべきかの課題を含め今後の有り方の提言をしていく。

ドキュメンテーションは保育者による観察記録と言える。それは「子どもの発見を他の保育者・保護者・子どもと共有するために慎重に選択されたものであり、具体的には、子どもの会話を記録したノート、録音したテープ、子どもの活動を撮影した写真・ビデオ・絵・粘土などの子どもの作品等から得た情報を反映させたもので、子どもの考えや認知過程を理解することを容易にしたものである。このドキュメンテーションから得た共通の情報を基に保護者や他の保育者が子どもの成長を同じ方向で共にみつめ、より良い子育てを探究するため保護者との共同作業によって、次の成長に繋がる子どもの姿や発達・興味関心を発見していくことが出来る」とされてい

る。

ドキュメンテーションの発祥地といわれているイタリアにおいて、女性の社会進出の歴史的背景がこのような保育の伝達手法を生み出したのは至極当然と考える。

つまりは女性の社会進出とともに子どもへの教育的関心が高まることを考えれば、施設側がどのように子どもの発達を伝えていくのかは大きな焦点になる。更にドキュメンテーションは単なる教育や保育の説明ばかりでなく、保護者の施設等への教育や保育への参画そのものを指しており、子育ての協働的な営みを模索したものである。

さて前述したドキュメンテーションの本来の目的を前提とし、今回の調査研究を含めたいくつかの点を述べていきたい。

今回の焦点である家庭への関わりや保護者への提言の前に保育のドキュメンテーションの実践による保育者と子どもへの効果を述べていきたい。

ドキュメンテーションの作成は、保育者にとって用意した保育環境に対して、子どもがどんな関わりをし、どのような思いを抱いたかを記録するものであり、それはとりもなおさずどのような教育的効果があったかを記録することになる。この教育的効果をどう説明するかは、日本の保育界にとって長い間の焦点であったと言っても過言ではない。近年日本においても、ドキュメンテーションという手法が急速に保育現場で行われ、その成果をあげていると言える。

ドキュメンテーションが日本に根付き始めていることが、日々の保育の教育的効果をどう説明するのかに繋がり、その効果を今後の保育にどう役立てるか、また繋げていくのかという経緯を生み出し次に発展していく。更に言えばこの可視化による手段は保育者同士の教育や保育への理解を引き出しており、指導する立場の保育者にとっても指導や助言がしやすいものとなっている。特に若い保育者に好まれているのもその特徴と考える。

施設における保育の教育的効果を説明するドキュメンテーションの作成がこれまでの文字を中心とした媒体で説明するという一辺倒のやり方ではなく、この数年で急激に普及したパソコン・デジカメ・スマホ等によるものを大いに活用し写真などで視覚化したものであることが、若い保育者にとっては容易な伝達手段であったことが大きな効果をあげている要因である。この事が子どもの保育の追体験と学びの確認につながり個人記録等へも良い影響を与えていると思われる。また保育の質の向上には、今までのように保育内容や職員の質の向上のための研修、保育の環境整備、自己評価など計画的な取り組みと共に、ドキュメンテーションの自園で作成できる研修教材及び保育資料という手法が今後保育の現場においてより大きな役割を果たしていくことになる。

さて今回のテーマに戻って考えてみよう。このドキュメンテーションが保護者・家庭教育の一助になれるかという事である。今回最初のアンケートにより保護者の子育てへの不安がいくつか見えてきた。その結果をもとに園で行われているドキュメンテーションによって、その不安を少しでも和らげることができ、家庭における子育ての実践に影響を与えることができるかを検証することを目的として具体的実践を踏まえ研究を進めてきた。この実践により各園でのドキュメンテーションは保護者への一助として少なからず効果を上げていることが確認されている。また最初に述べた保護者や家庭の子育てへの一助は、地域への共助構築と共に、ドキュメンテーションを通して職員ばかりではなく保護者も交えた協働性などインタラクティブ(相互)の主眼が第一義となり、その点においてもそれぞれの支援をしていると考えられる。

次にこれらから見えてくる今後の課題を２点述べてみよう。1点目は、ドキュメンテーションを通して協働的子育てを展開していくということである。

どの園でも行っている園全体の保護者会やクラス全体懇談会の席上で、ドキュメンテーションを用いた保育の説明会や検討会を催し、それにより教育や教育の説明と共に、車の両輪の如く保護者と保育者が保育所において一緒に子育てをする確認や、また子育ての考え方を共有することに繋げていく効果と同時に、個々の子育てへの一助にしていくという手段としても考えられる。つまりドキュメンテーションの本来の意味である一人の子どもの成長を園の保育者と保護者が共通の認識のもとに子育てをしていくという考えに繋がってくる。

しかし現時点において保育現場では上記のような流れはまだ未成熟の状態にあり、その効果は見えておらず、実証に取り組む園もいまだに少ない。ドキュメンテーションにより、日々の保育や子どもの成長を伝えることにより、保護者と保育者の双方の子育てに対して相互理解が成り立ち家庭の子育てをより豊かにするための一助にする上でもこれからの大きな研究材料であり、これからの大きな課題の一つである。今後の日本の乳幼児教育の新たな一面、それは教育施設から子育ての協育という概念が生まれてくる素地となりうることである。

２点目の課題は直接保護者個人に対するアプローチである。平成20年制定の現保育所保育指針は保護者と園の関係を車の両輪と捉えている。とかく一方的な関係、例えば園への依存関係や園主導という時代もあったが、車の両輪という考えは適切なところにあると思われる。ドキュメンテーションを通して連絡帳や保護者との会話では伝えにくい通常保育の中の発達や学びを見ることが出来る。又子どもの成長、発達に関係した写真を加えた画面構成により説明してもらうことは若い保護者にとっては解りやすく興味関心を引き出すものである。更に保育や子育てに対する思いを保護者から引き出すコミュニケーションツールとしても適切であるし、保護者にとっても受け入れやすいものと考えるのである。これらの意味において園の役割を分かりやすく理解してもらい、同じ

方向を向いて子育てをしていくことができる。いわゆる保護者への指導を超えた共育という概念になっていくのである。

現在の保育制度において給付は一体化されたが、二元化から施設は多元化された時代になっている。将来の施設一体化までもう少し時間を要する中で、保育所という存在をどう進めていくのかは大きな課題と考える。保育所は本来より保護者との結びつきが深く、家庭との協働により子どもの発達がより良く進められる児童福祉施設である。そうであるとすれば今回の調査研究によってドキュメンテーションの保護者への一助が更に増えていく事が大切であり、その課題と共に次の展開が必要であると考える。

参考文献：「保育サポートブック４歳児クラスの教育」
（世界文化社発行:保育総合研究会監修）
同：　「プロジェクト型保育推進事業　保育の質の向上
平成26年度実施報告書」（舞鶴市/舞鶴保育園長会）
同：　日本保育協会平成25年３月号４月号５月号「保育界」より坂崎隆浩によるドキュメンテーションについての文章（日本保育協会）

資料：「保護者の子育て意識調査」における保育士・保育教諭の自由記述欄より抜粋

・保護者と子どもとの会話をよく耳にします。言葉遣いがきたないことが多く、注意をするときはさらに口調がきつく、言葉遣いもより汚いことがあります。子どもたちに正しい言葉遣いを指導している中で、どうしたものかとつくづく考えさせられます。
・アンケートとは少し離れるかもしれませんが、最近父親の子育てについて、子育てに関心がある、ないが、両極端すぎるのが気になっています。
父親の子育て参加は働く母親が増え大切なことと思いますが、なかなか難しいです。
・兄弟が多いと上の子どもも甘えたいときでも、親が「兄姉でしょ」と言って下の子ばかり甘えさせていて、上の子が不安定な姿がよく見られる。そう思うと、親の都合で下の子を園に預けて出かけていることもよく見られる。園でしてほしいことの要望が多くなってきている。(例えば日焼け止めを塗ってほしいなど)
・主に子育てしている人は98％母親ということから、女性に負担がかかっている現状がみられる。アンケート（4）（5）ともに②を付けた親は「反省中」という文字を書いていました。
・いろいろな面から価値観の多様化を感じることがあります。
・園での気づきとして…園側（保育士）から保護者を見て感じたのと統計結果にひらきがあった。例えば（3）子どもがすることを先回りして、代わりにしてしまう　①が４名しかいないが、まだ多いような気がする。(1）の「～したらダメ」と行動制限する　について、教育という面で子どもに「～したらダメ」と注意し、制限をかけた方が良いのでは？と思う保護者ほど③ほとんどしない、に○をしていたのでは？と感じた。
・保護者によって質問のとらえ方がバラバラなので、回答の正確性がどこまでなのか。
アンケートを見る限り、かまえて回答しているようにも感じる。
・30代母親が子育てをしている人が多い。こうあるべき、という子どもの姿はあまり気にしていないように感じられる。
・Ｑ６で「ない」とこたえた保護者は子どもに対してどう思って育っているのか？
子どもを尊重し、自発的行動をゆっくり見守っているのか？または無関心・放任なのか？
アンケートの一部分を見てみると、「ゆとりをもって子育てができているようだ」と考えられるところも見られるが、多くの保護者は、やはり時間に追われ毎日忙しい中、子育てをしていると感じられる。仕事と子育てに対し、一生懸命なんだと思えるが、子どもに対して真剣に向き合っていると感じられる保護者と、親自身が自分自身を優先に考えるあまり、子どもたちを無理やり自立させた家庭の保護者がいる。しかし、子どもにとって本当の自立ではなく、みせかけの自立で心が本当に育っているのか、心配である。私たちの役目として、少しでも親の気持ちにゆとりが持てるような働きかけや情報の発信をしていき、親が子ども達に適切に手をかける等、本当の意味での子育てを園・家庭・地域で協働していかなければならないのではないかと感じた。

資料：ドキュメンテーション実施後の保護者と職員の主な感想

○ 保 護 者 の 感 想（抜粋）

０歳児

・家では出来ないだろうと決めつけていたのですが、今度からはさせていこうと思いました。
・自分で食べようとすることは子どもにとって大切だという事がわかった。
・家だとついついダメ！！と言ってしまい、行動が制限されてしまいます。ダメ！！から遊びに変える環境に共感です。

1歳児

・最近よく「ダメ・危ない」と言っています。見立てて近い環境で遊ばせてあげるという方法もあったんですね。
・今月のドキュメントを見て、反省させられました。子どもにとっては成長なんですよね。
・食べる時こぼしたら、「あ〜あ」と言ってしまいます。怒らず伸ばしてあげたいです。
・色々なものに手を出そうとするので、ハラハラしてつい止めようとしてしまうけど、ゆったり見守ってみようと思いました。
・色々興味を示す時期で大変な事もあるけれど、一呼吸おいて接してみたいと思いました。
・時間を優先的にしてしまい、ゆったりとした気持ちを忘れてしまいがちなので、気をつけようと改めて感じました。
・「オモチャ箱ひっくり返し」よくあります。「あ〜！」と思ってしまうけど、子どもが学べていると思うと見方も変わりそうです。

2歳児

・忙しいとつい「ダメ」と言う事が多くなりますが親が子どもに対してわかりやすく冷静に話す参考になりました。
・禁止用語をつい使ってしまうが、それでは子どもには本当の意味で伝わらない、響かないのですね。
・写真付きで、とても分かりやすい解説で「あ〜！取り上げずに子どものペースで一緒にやっていこう」と思った。
・大人の都合でついつい時間を決めてしまいがちですが、子どもの気持ちも考え、家でも見守っていきたいです。
・共感できますが、実際はなかなか思うようにいきません。
・先生方の丁寧な指導の結果なのだとドキュメンテーションをみて感じました。
・日々の園での保育の場面が垣間見られて改めて感謝の気持ちが湧きました。
・どうしても大人＝親は時間を気にするので「早くして！」と言ってしまったりつい手助けをしてしまったり…子どもの一つ一つの行動は学びの大切行動なので大切にしていきたいと改めて感じました。
・１つの行動にもいろいろな過程があってその積み重ねによって成り立っていることがよくわかりました。
・このドキュメントを読んだ日の夜、ティッシュをビリビリやぶって遊ぼうとする息子の姿が…いつもなら「ダメ！！」と怒ってしまう所、ひと息つくことで、思いっきり遊ばせてあげることができました。

3歳児

・朝は忙しいのでついつい手を出してしまいます。ＴＶを見る前に着替えを済ませてから…と習慣付け中です。一緒に考えることも大切ですね
・（ドキュメントの）写真を見ながら子どもと話ししています。
・出来た時はしっかりほめ甘えてくる場合は必要に応じて手助けをし、一緒にやるようにしています
・家でも一人でできたときは満足そうな顔をしています。これからも一人で頑張った時は褒めようと思います。
・「過ぎてもいいんです」という言葉に安心感を持ちます。言葉の使い方、気をつけようと思います。
・子どもに「はやくはやく！」と言って、つい手を出してしまうのは、自分にゆとりがないからなのかなぁ。今は自分の時間よりも、子どものペースに合わせた毎日を過ごすことが、母としての務めだと思いました。
・毎日「急いで！」とばかり言っています。そして後から後悔。やる気スイッチを見つけてあげられる言い方をしたいなあーと思います。
・「ダメダメ」ではなく、楽しいことを目標として出来ることを増やしていきたいですね。
・調子にのるくらい誉めて、やる気スイッチＯＮ！そして、すぐグズグズで怒ってしまうけど、時々思い出してスイッチＯＮ！

4歳児

・子ども目線での動きやすい動線づくり、家庭でもやってみようと思いました。
・園では自分たちでくり返しすること、考えてしていることで上手になっていることを読んでナルホドともう一度気付かせてもらいました。写真で様子がよく分かっていいです。家でもお手伝いが増えました
・「やりたい」と思ってくれている気持ちを上手に受けとめて継続できるようにしていきたいです。
・家でも手伝ってくれた時は、大袈裟に感謝するようにしています。今後は「お仕事」として家庭で役目をもってくれたらなあと思います。
・家でも積極的に自分でしようとしてくれるのに、失敗するとついつい…とても反省しました。
・忙しい時は、また今度と言ってしまいますが、これを読んで家でもお手伝いしてもらおうと思いました
・日頃のお当番の様子がみえて、大変よいと思います。また、時々このような活動を紹介していってもらえればと思います。
・行事だけではない、日々の生活の様子が分かって良かった。他のクラスの様子も見たい。
・ふだんの園での様子が分かってよいと思います。

5歳児

・大人が何でもかんでも口や手を出すのではなく、子どもたちに自主的に考えさせるのは良いと思う。
運動会、頑張ってほしい。

・アドバイスひとつで子どもってこんなに力を発揮するんですね。１から10まで全て答えを出すのではなく、一緒に考えてみる心の余裕を持ちたいと思いました。
・考えて行動できるよう、待つことも大事だと改めて感じました・「早く！早く！」は控えようと思います。
・「自分で考え自分で行動する」これから子ども達が大人になり、社会に出て行く基盤になると思います。家でも経験させていきたいです。
・大人が先に口を出してしまうことで、子どもの考える芽を摘んでしまうことになるのだと反省しました。「待つ」心の余裕をもてるようにしたいです。
・つい、「急いで！！」が口癖になりつつある中、子どものペースに合わせてあげて自分で考えて自分で行動させたいと思いました。

異年齢

・子どもが少ない家庭が多い中、唯一多くの子ども達と過ごせる園での生活は重要だと感じました。家庭では大人から子どもへ伝える際に強要になってします事も多々あります。園でこの様に子供同士学べる事ができるのは大人＝先生方がサポートをしっかりして下さっているからできるんだなぁと思いました。
・家庭では“自分で行う”という自発的な行動、言動がありながらも、家族の中で一番幼いということで“してもらう”“やってもらう”が当たり前でまだまだ家族の“手”が必要と思っておりましたが、この風景を見て驚きと子どもの自立を実感しました。とても頼もしく誇らしいです。本人も“お兄ちゃんの顔”。すごい!！もう少し“子離れ”して息子の自立を見守りたいです。
・何気ない日常の場面も異年齢保育をすることで、成長と学びになっているのだなと感じました。兄弟がいない家庭でも保育園での関わりが大きなものにつながるような気がします。
・うちの子は、保育園でのことをあまり語ってくれません。この写真を見せると、給食のことをいろいろ話してくれました。子どもから話を聞き出す良いきっかけになったと思います。
・3歳になると連絡ノートもなくなり、先生ともなかなか話せなくなったと感じていたので、こういうのがあると、園での様子がわかってとてもうれしく思います。

資料：ドキュメンテーション実施後の保護者と職員の感想

実施した職員の感想（抜粋）

・「いいね！シール」は多くもらえたが、コメントがなく残念だった。
・保護者の方にわかりやすく、自分の思っている事・伝えたい事をドキュメントとして伝えるのがとても難しかったです。保護者の方に見てもらいたくさんのコメントをいただいた中で、「家でも取り組んでみよう」「子どもと一緒に楽しみながらやってみようと思う」等のコメントが嬉しかったです。
・写真や文字におこして客観的に子どもの動きを見ることができた。
自分たちが行っていることを第３者の視点から見ることで、改善的などに気づくことができてよかった。
・ドキュメンテーションをすることで、子どもたちの行動をじっくりと見直すことができ、良かったと思う。子どもへのかかわり方、声掛けの仕方など工夫していきたい。
・保護者との連携を密にし、家庭の状況や保育園での様子を、お互いが積極的に伝え合える環境を作っていくことが大切だと思った。
・保護者の方に、より伝わりやすいためのレイアウトや文章を心がけた。保護者の方から実際に感想を頂くことができて、内容の理解や考えが知れたので実施する機会を頂けて良かった。
・作成する際に、ドキュメンテーションの題材としたいものは浮かびましたが、伝えることを絞り込むことや読んでもらいやすい…文字数､レイアウトにするにはどうしたらいいかということに苦心しました。プリントを発行・掲示してからは「いいね」の印が増えていくことを毎日楽しみに、励みにしていました。又、アンケートを回収する中でまずは読んで頂けて、感想を下さるということが嬉しく感じました。内容を読み、保護者の方の思いを知ることができたり、感謝の言葉を頂けて嬉しかったりこれからもやり方を知りたいとの期待に応えたいという思いになりました｡クラスの担任まで回し読みさせて頂いたので皆、日々の保育の励みになったことと思います。今後も期待に答えて是非、ドキュメンテーションの作成をしたいです。
・保護者の方の育児に対する不安や悩みを、保育園、保育士も理解し、いかに子どもの育ちにつなげるかということを私自身考え作成をした。
保護者からの感想を伺うことができ、私自身も励みになった。これからも、子どもの成長・発達を保護者と協感しながら、育ちの理解につなげていきたいです
・乳児期の子ども達の思いや発達過程について、論述で書き記すのではなく、実際の子ども達の姿を写真で掲示し、家庭での場面を想像しやすくした事がたくさんの共感を得る結果となったと思います。大人からすると、子どもの行動に対して「どうし

てそんなことするの？」と思う事も、実は乳児期の発達過程においては意味のある行為だと知る事で、マイナスをプラスのイメージに変えて子育てを楽しめることに繋がればと思います。
また、現在、幼児の子育てをしている保護者の方からも「いいねシール」を沢山頂きました。過去の自分の子育てを振り返る機会となりました。

・実施したクラスの保護者だけでなく、他のクラスの保護者の方にも見て頂けて共感して頂いたことで、自信にもなりました。今、伝えたいことなど、様々なドキュメンテーションを考えてやっていけたらいいなと思いました。
・子どもたちの様子を写真を使って、張り出したことで保護者の方も興味を持って見てくれていたように感じる。「こんな姿が見られるんですね！」「写真を使ってもらえて嬉しいです」という声も聞かれて、保護者の方へ伝える方法も文字だけでなく、いろいろと工夫する必要があると改めて感じた。ついつい先回りして大人がやってしまうような場面で、この時が子どもの力が伸びる大切な機会であるということを知ると、子どもたちが苦戦しながらも試行錯誤して時間をかけてやっていることを肯定的に見て、見守っていくことができるのではないかと思った。これからも、子どもたちの行動の意味や発達を保護者の方に知らせていくことで子育てを一緒に支えていけたらいいなと感じた。
・送迎時、園での様子を話していたが、ドキュメンテーションをした事で目で見て聞いて保護者も更に様子がわかり、子どもに対する理解が深まった事を感じられた。その様子を通して、言葉で伝えるだけでは話が伝わっていない所もあったことを反省した。ドキュメンテーションを通して日々の子どもに対する悩みの相談を受ける機会が増え、保護者との対話のきっかけづくりにもなり、関係も深まった。ドキュメンテーションを通して、保護者との対話も多くなり、伝えるという事の大切さをよく考えさせられただけでなく保育教諭自身の保育の見直しができ、一人一人の子どもの理解にもつながった。
・クラスの中で子ども達のちょっとした「つぶやき」などを集めながら伝えられていくようにしていきたいと思います。
・普段５歳児に関わっていないと食育等どういう事をしているのか分からない事が多かったが、今回のドキュメントを見てこども園で、どういう食育の活動をしているのか、よくわかって良かった。
・教育課程等で日々のねらい等知っていても、なかなか目には見えない。ドキュメンテーションで保育教諭の思いや子どもの感じ方や実際の行動、また、結果として普段何気なく行っていることが、子どもをどう育てているのか目で見て確認する事ができた。子どもの育ちが5領域で書かれていると、もう少し詳しくなり、また見た人もこれは教育なんだと感じられるのではないかと思った。
・今後も色んな場面のドキュメンテーションを発信し、育児について考える機会を増やしていきたい
・大人側の視点ではなく、子どもの立場になって何故そういう行動をするのかを子どもの成長発達の上で教育的な意味合いがあると説明することで、ネガティブにとらえていたものがプラスとしてとらえて下さった方が、「いいね！シール」を貼ってくださいました。
普段、保護者に保育園の取り組みの意図を伝える機会がなかなか持てないので、ドキュメンテーションで保育を可視化し、保護者に「子育ての楽しさ」や「子どもの事」を伝える事が出来るのはとても意味があると思いました。そして一方的でなく、その取り組みについて保護者の反応を知る事が出来たのも良かったです。

研究協力者　（所属）

福澤　紀子（つるた乳幼児園）	東口　房正（ふじが丘保育園）
田中　啓昭（もくれん保育園）	岩橋　道世（るんびいに保育園）
佐藤　里代（明円寺保育園）	只野　裕子（こども園青森よつば）

この研究につきましてご協力頂きました各園の職員、保護者の皆様に感謝申し上げます。